

TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の

Funky Corner

最終回

文・撮影●波多 利朗 text and photo by Hata Toshiro

(URL) <http://www.funkygoods.com/>(E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp現場の味方！ 質実剛健！ 実用一本槍！
Psionのタフガイ端末、Workabout

ポケピーのこと

筆者は以前、本誌コラムにて「常用しているPDAは無かったりする」と記載した。これは幾分誤りであり、白状すると実は1台使っている端末があったりする。筆者はDOS全盛時代の生き残りであり、完全に時代遅れの人間であり、しかもスケジュール管理は手書きの手帳で行うという頑固者だ。しかし、仕事上メールチェックを怠ることはできない。どこにしよう、いつ何時であろうと、それこそ地下鉄日比谷線の駅のトイレの個室の中だろうが、メールチェックができないといかのである。これって考えてみると、かなり悲しい人生だ！、（汗）

以前はPanasonicのLet's noteにAirH™を突っ込んで持ち歩いていたのだが、最近外出が増えるに連れて、それすらしんどくなってきた。そこで購入したのが、「ポケピー」というワケだ。さて、ポケピー即ちPocket PCを選んだ理由であるが、ただ単にPDAとしてはそこそこ安かったというだけである。いやねえ、ホントはリナザウ（Linux搭載版ザウルス）が欲しかったんすけどね、ありゃ高すぎですよ、高すぎ！　なんでPDAに7万近くも出さなきゃならんのか！と、思わず店頭で叫んでしまいそうになったもんだ。（汗）

それに比べると、ポケピーは「そこそこ」安い。今回購入したhpのiPAQ h2210は、秋葉原の某hp代理店の格安ショップで購入したが、3万円台中盤でゲットできた。

まあ、これでも高いほうだと思ったりするんだが……。確かにリナザウはマニア垂涎のマトであり、筆者も本当に欲しただけどねえ……。 (写真A)。

さて、DOS時代にconfig.sysとかautoexec.batとかをコテコテに編集しながら、HP100LXでe-mailやWebブラウジングを行ってきた筆者にとって、箱を開けてから15分足らずで、メールもWebも設定できてしまうポケピーは、まさに隔世の感有りといったところだ。世の中便利になったもんだと感心する一方、何か物足りない。まあ、実用一本槍で購入したのだから、これはこれで良しとし、「受信トレイ」を起動させてみると、意外に動作が緩慢だ。でもって今度は「Internet Explorer」でWeb閲覧してみると……。こちらも思っていたほど速くはない……。というわけで、メール受信には定番の「nPOP Ver1.0.1」を、Webブラウザには、これも定番中の定番「NetFront Ver3.1」をインストールして、ようやく環境が整った。

まあ、そんなこんなで、DOSとCGAにどっぷりと浸かってきた筆者にも、ようやく文明開化の灯がともし、人並みに最先端PDAとやらを使っているのだが、出先でPPTとかXLSファイルを確認できるのは大層便利である。またh2210はSD+CFと拡張スロットが充実しているので、CFタイプのAirH™カードや802.11bの無線LANカード、さらにはCFタイプのグラフィックスカードなんかも使用できる。筆者はAirH™カードにホンダエレクトロンのAH-H403Cを、また無線LANカードにI・O DATAのWN-B11/CFZを、そしてグラフィックスカードは、同じ



▼筆者が密かに使用している端末、hp IPAQ h2210

IPAQとAirH+カード、無線LANカードがあれば、ほぼ無敵。どこでもメールとWebをチェックすることができる

くI・O DATAのCFXGAを使っている。出先でのプレゼンテーション等に、パソコンが無くてプロジェクタやTV画面にPPTファイルを出力できるし、無線LANのスポットがあれば、快適にWebブラウジングが可能で、世の中便利になったもんだと感心することしきりである…。

それにしても、PDAの値段は何かならないのだろうか？ 中途半端に高いもんだから、みんなサブノートを買ってしまって、PDAが売れなくなる。すると、量産効果が出ず、いつまで経ってもPDAの値段が下がらない、といった負のスパイラルが続いているように思える。加えて昨今の携帯電話の多機能化が拍車をかけ、PDA離れは進む一方だ。秋葉原でも、以前はかなりの数の店舗がPDAを置いていたものだが、最近では売っている店を探すのに一苦労する。これは由々しき問題のような気がする。識者先生がおっしゃるように、PDAは携帯電話に取って変わられてしまうのだろうか？？

話しの始まりである。今回もPsionかよ？なんて言わないように。まだご紹介していないPsion端末、Workaboutについてである(001)。

Psionと聞いてほとんどの方はその美しいデザインを思い浮かべることと思う。一連のPsion製品の日本語エディタを開発した奇人、柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos)氏をして、「グラファイト製の二枚貝のような魅力的なフォルム」と言わしめたこれらの製品群は、ここ極東の島国にも多くのファンを生み出した。そのPsionが製造した業務用端末機、それがWorkaboutである。

業務用ということで、デザイン的には現場でビシバシと情報収集を行うことができるよう、人間工学に基づいた質実剛健の形状を採用している。おおよそPsionらしからぬその外形を見ると、筆者など護身用具の「スタンガン」を思いうかべてしまうほどだ。Psion Series 3のプロポーションとは全く異なり、縦長にレイアウトされたWorkaboutは、当然のことながら防塵・防水仕様で、IEC規格(防水・防塵に関する規格)IP54(生活防水)をクリアしている。動作温度も-20℃~+60℃と、こちらもヘビー級だ。

Workaboutが発売されたのは1995年。日本ではワカバが輸入総代理店として、現在でも販売している(002)。



●ワカバ

<http://www.wkab.co.jp/>

この端末は産業用途向けで、アウトドアでの使用を想定した製品であったこともあり、一般ユーザの目に触れる機会は少なく、Psion製品の中では異端児的な存在である。まあ、一般民間人は余り使う機会が無いだろう

異端Psion、Workabout

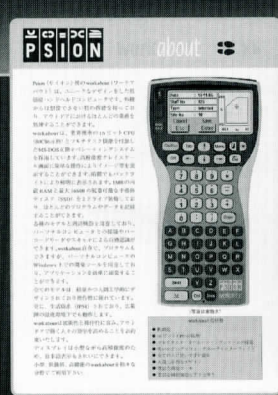
さて、本題に入ろう。例によってカルトでマイナーな

001

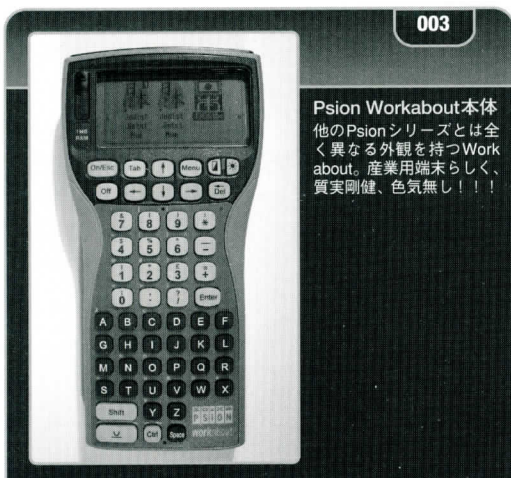


Psion Workaboutの元箱と本体
Workaboutのカラーリングは黄色が基本だが、本個体はグリーンとなっている。バージョンによって本体ケースの色が異なっていたのだろうか？

002



Psion Workaboutのカタログ
ワカバが制作したPsion Workaboutのカタログ。この手の端末で日本語カタログが存在するのは珍しい



003

Psion Workabout本体
他のPsionシリーズとは全く異なる外観を持つWorkabout。産業用端末らしく、質実剛健、色気無し!!!



004

Psion Workabout背面の銘板
1995年イギリス製マシンであることを示す本体背面の表示

(003, 004)。

以下にPsion Workaboutの初期型の仕様を示す。後述するが、後期型はCPUの処理速度がアップしており、それに応じてRS-232Cの最大通信速度も上がっている。

Workaboutの構成

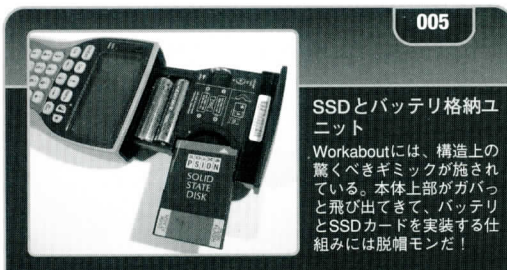
それではさっそくWorkaboutを使ってみよう。耐衝撃ボディ採用だけのことはあり、本体は手に持つとずっしりと重い。グリップしやすいよう、筐体中央部分から下が絞られた形状になり、いわゆる「頭でっかち」のデザインだ。これを持っていれば、暴漢に襲われても、護身用具として使うことができる。、(´ー´)ノ

表1 Workabout初期型仕様

| モデル名称 | Workabout |
|--------|--|
| メーカー | Psion |
| 発売年 | 1995年 |
| CPU | NEC V30 (80C86互換CPU) 7.68MHz |
| 内蔵RAM | 1MB |
| 内蔵ROM | 1MB マスクROM (OS内蔵) |
| ディスプレイ | 240×100 dot グレースケールLCD 39文字×12行表示 (バックライトはオプション) 【Activ Area: 62mm×29mm】 |
| キーボード | 英数字57キー (配列は独自) |
| I/Oポート | 最大3ポートまで搭載可能 データ集配接続ポート (LIF) バーコードI/FとRS232Cポート (オプション) スキャナ (TTL) とRS-232Cポート (オプション) |
| 大きさ | 180 (H) ×90 (W) ×35 (D) mm |
| 本体重量 | 325g (バッテリー含む) |
| バッテリー | メイン: 単三型電池×2本もしくはニッカド充電電池 サブ: CR2016 |
| SSD | 2スロット (Flash/RAM SSD)、最大16MBまで搭載可能 |
| 搭載OS | EPOC OS ROM V3.56F 1995/01/01 09:00am版 |
| 内蔵ソフト | Lotus1-2-3互換表計算、住所録、電卓、リンクソフト、OPL開発言語 |
| 音源 | ビープゼー |
| 動作温度範囲 | -20℃～+60℃ |
| 保存温度範囲 | -25℃～+80℃ |
| 静電気規格 | IEC801 (8KV) |
| EMC規格 | EN55022、FCCクラスB |
| 動作環境 | 防塵、防水 (IEC規格 IP54) |

LCDディスプレイは240×100ドットの解像度を有している。Psion Series 3が240×80ドット、Series 3aが480×160ドットであったから、Series 3よりも縦方向が20ドットだけ大きい。解像度は異なっているがグラフィックスの互換性は他のPsion製品と完全に保たれており、後述するようにSeries 3用に制作されたソフトウェアは、Workabout上で問題なく動作させることが可能である。LCDにはオプションでバックライトも搭載されており、暗い所では画面全体が淡いブルーに浮かび上がる。

LCDディスプレイの横にあるボタンは、Solid State Disk (SSD) とバッテリーを交換する際に使用するドロワボタンだ。このボタンを押すと、ナント! 上部パネルが上に飛び出すというギミックが付いている。元々Workaboutの上部パネルには、オプションで各種I/Fを搭載することが可能である。Psionの記憶デバイスとして一般的なSSD



005

SSDとバッテリー格納ユニット
Workaboutには、構造上の驚くべきギミックが施されている。本体上部がガパッと飛び出てきて、バッテリーとSSDカードを実装する仕組みには脱帽モン!



006

バッテリー格納状況
手前にCR1620ボタン電池を縦に挿入する。メインバッテリーは単三乾電池2本を奥に搭載する



007

標準のI/F端子
Workaboutには3つの拡張I/Fを搭載することが可能であるが、デフォルトでは本体下部にLIF-PFSコネクタ1個が搭載される



008

本体上部カバー
拡張I/Fを搭載する場合には、この本体上部にコネクタが並ぶ。RS-232C等のD-Sub 9Pinコネクタはここに搭載される

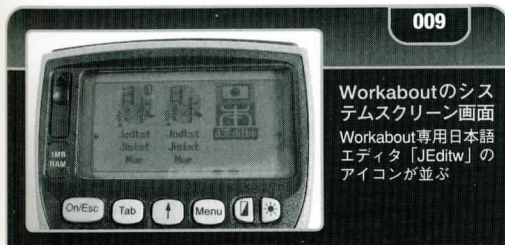
は、A、Bの2ドライブを搭載可能だ。メモリバックアップに使用するCR1620リチウムボタン電池も、この部分に搭載される(005、006)。

外部機器とのI/Fであるが、本体下部にLIF-PFS (Low Insertion Force-Power & Serial) コネクタが標準で装備されている。こちらは産業用途らしい仕様だ。一般的なRS-232Cコネクタは、本体の上部パネルにオプションとして搭載する。今回紹介した個体には無いが、本体上部パネルには、最大2個のI/Fコネクタを搭載することが可能だ(007、008)。

キーボードは当然防水・防塵仕様で、QWERTY配列ではなく独自配列だ。上部にテンキーを、下部にアルファベット順に並んだ英字キーを配したもので、クリック感は無いの、クリック音を出すことができる。しかし、QWERTY配列に慣れた身にとっては、入力はずらい。

OSはもちろんEPOCをROMで搭載。さらに内蔵アプリケーションとして、データベースソフトの「Data」、科学技術計算用の「Calc」、スプレッドシートの「Sheet」、通信ソフトの「Comms」と、お馴染みOPL開発環境が格納されているため、Workabout上でプログラミングすることも可能だ(009)。

さて、Workaboutは上述のように、日本ではワカバが総輸入代理店として販売している。今はどうなのか確認していないが、Workaboutが日本で発売された当時、本社では日本語表示を可能にするライブラリを添付していた。「KANJIOUT.DYL」というファイル名のライブラリは、PsionのSIBO (Single Board Organizer) アーキテクチャのマシン上に日本語を表示させるためのもので、こ



009

Workaboutのシステムスクリーン画面
Workabout専用日本語エディタ「JEditw」のアイコンが並ぶ

れを使用することでOPL言語を用いて日本語のアプリケーションを作成することが可能となる。またWorkabout専用フォントとして「リョービ本明朝14×14」フォントも添付されていた。

お約束(日本語化について)

互換性の高いPsionシリーズでは、柴隠上人 稀瑠冥関守 (Kerberos) 氏制作の日本語エディタ「JEdit」が、ほぼ全機種向けに用意されている。Workaboutもその例外ではなく、専用のJEditは下記のものが存在する。

- JEditw (jmemo用14ドットフォントを使用した標準タイプ)
- JEdite (8ドット恵梨沙フォントを使用したタイプ)
- JEditwr (ワカバ製リョービ本明朝14ドットフォントを使用したタイプ)
- JEditwd (ワカバ製リョービ本明朝14ドットフォント+日本語表示DYLを使用したバージョン)

ここでは、最も一般的と思われるJEditwについて触れよう。

(1) ファイルの準備

JEditwは、表示フォント「フォント14」を使用したタイプである。このフォントは、HP95LXの日本語エディタとして有名な「jmemo」で用いられたものだ。エディタを動かすためには、このフォントファイルの他に、同じくjmemo用の辞書ファイルが必要である。以下に必要なファイルを示す。

- JEditw (Workabout専用JEdit本体ファイル)
<http://www.funkygoods.com/nazopa/index.html>
- FONT14.LZH (jmemo用14ドットフォントファイル)
- JISYO_L.LZH (jmemo用辞書【大】)

- BOLD102.LZH (フォント14ボールド化ツール、BOLD14.EXE)

JEditw本体ファイル以外の入手先は、よしなに……。まだniftyには登録されていると思うけど、最近チェックしたこと無いらなあ〜〜。ㄉ (´ー`) ㄱヤレヤレ

(2) 表示フォントの準備

上記アーカイヴが揃ったら、まずPC上の適当な作業フォルダに解凍しよう。以下の一連のファイルが揃うはずだ。

- JEDITW.APP (JEDITアプリケーション本体)
- PCONV14.EXE (フォントコンバータ)
- FONT.14 (jmemo用14ドットフォント本体)
- JISYO.DIC (jmemo用ラージ辞書)
- JISYO.IDX (jmemo用辞書インデックスファイル)
- BOLD14.EXE (フォント14ボールド化ツール)

Workabout上での表示フォントを見やすくするため、最初にフォント14をボールド化する。上記ファイルを格納したフォルダ上で、コマンドプロンプトからBOLD14.EXEを実行するだけで良い。次に、ボールド化したフォントを、Psionのビットマップデータ描画命令の仕様に合わせ、ミラー反転させる。これには、JEditwのアーカイヴ中に含まれるPCONV14.EXEを使用する。PCONV14.EXEを実行するとPsion用JEdit専用フォントである「PJFONT.14」が得られる。

これでフォントの準備はおしまい。

(3) ファイルのインストール

以下のファイルをWorkaboutの内蔵ドライブ (Mドライブ) の各フォルダにコピーする。別にMドライブにこだわる必要はないが、例えば文書フォルダは内蔵ドライブに置いたほうが良いだろう。Write OnceタイプのFLASH SSDに格納してしまうと、ファイルを更新する毎にディスクスペースが少なくなってしまうからね!

- JEDITW.APP → ¥APPフォルダ
- PJFONT.14 → ¥FONフォルダ
- JISYO.DIC → ¥DICフォルダ
- JISYO.IDX → ¥DICフォルダ
- ¥TXTフォルダの作成

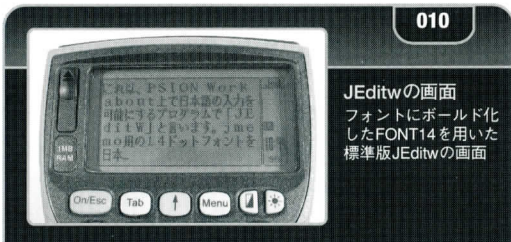
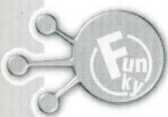
(4) アプリケーションの登録

最後はPsionの他製品と同様、アプリケーション登録作業を行う。「PSIONキー」+「1キー」でJEditwをシステムスクリーンに登録すれば完了である。

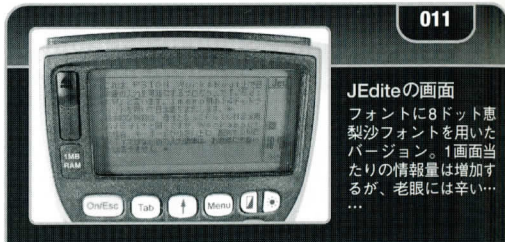
JEditwを起動させてみよう。標準版ではボールド化されたフォントが、横14文字×縦5行で表示される。最下行は入力行となる (010)。

恵梨沙フォント版のJEditwでは、横22文字×縦9行と、1画面に表示される情報量はほぼ2倍となるが、筆者のように老眼が進んだ眼には優しくない…… (011)。

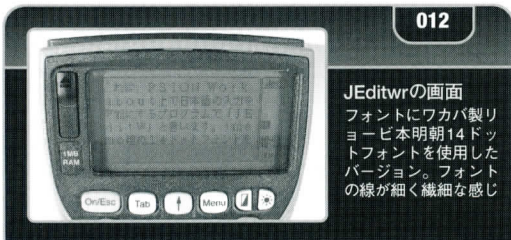
ワカバ製リョービ本明朝14ドットフォントを使用した



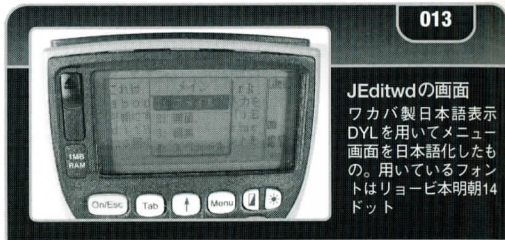
010
JEditwの画面
フォントにボールド化したFONT14を用いた標準版JEditwの画面



011
JEditwの画面
フォントに8ドット恵梨沙フォントを用いたバージョン。1画面当たりの情報量は増加するが、老眼には辛い……



012
JEditwの画面
フォントにワカバ製リョービ本明朝14ドットフォントを使用したバージョン。フォントの線が細く繊細な感じ



013
JEditwの画面
ワカバ製日本語表示DYLを用いてメニュー画面を日本語化したもの。用いているフォントはリョービ本明朝14ドット



日本語表示DYLを用いて制作した日本語アプリ
柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏が冗談で作成した、「クトゥール
一巻風召喚ソフト」。もう、何がなんだか……でも、メニューも含め
全て日本語化できている。ビューキダ

JEditwrは、フォントが繊細であるが、すっきりとして上品な画面だ。表示文字数は、標準版と同じく横14文字×縦5行だ (012)。

最後に、JEditwdであるが、表示そのものはJEDir同様、リョービフォントを使用する。しかし日本語DYLを搭載したため、メニュー画面が全て日本語化されているのが特徴だ! (013)

日本語DYLを使用してOPLでプログラミングを行うと、日本語アプリケーションが簡単に構築できる。一例として、これまたビューキダが柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏がWorkabout上で動作するクトゥール召喚呪文表示プログラムという、もう何がなんだか判らないものを作成したのでご紹介しておく。なるほど、メニューも含めて全て日本語化されておるな。ヽ(´ー`)ノ
しかし、こんなプログラム作って、いったいどーすんだよ!ヽ(´ー`)ノ (014)

さて、Psionのグラフィック周りの互換性が高いことを示すために、WorkaboutでPsion Series 3用のJEditを起動させてみよう。Series 3のLCD画面は240×80ドットとなっており、Workaboutより縦方向が20ドット少ない。よって、Series 3用のアプリをWorkaboutで動作させると、表示画面の上下10ドットずつが使用されずに表示する。プログラム自体には、何らパッチを当てることなく動作できるので、互換性という面ではかなり高いと言えるであろう。ちなみに、Series 3用JEditの画面構成は、横20



Psion Series 3上で動作するJEdit
こちらは、本家Psion Series 3上で動作しているJEditの画面



Psion Series 3とWorkaboutで動かした、Series 3用JEdit
Psion製品は互換性が高く、このようにSeries 3用に作成したソフトが、Workabout上でもちゃんと動作する。同じソフトを2台のマシンで動作させているとこ

文字×縦7行となる (015、016)

数字キーパッドオプション搭載Workabout

さて、次はWorkaboutの変わり種、数字キーパッド搭載版の登場だ! これは、数値入力を多用する現場での業務に合わせた仕様で、アルファベットキーが排され、数値キーと四則演算キー、それに4つのファンクションキーが、「これでもか!」というくらい大きく配置されている、極めてユニーク製品だ。本体上面には、QWERTYキーの代わりに4つのファンクションキー、四則演算キー、テンキーが、それぞれ手袋をして操作しても押し間違えないほど大きく配置されている。また、「Yes」キー、「No」キーといった特殊なキーも、緑と赤に配色されて搭載される。実はこのYes/Noキー、何のことはない、タダのYとNのキーなのであるが……。ヽ(´ー`)ノ (017)

この数字キーパッドオプション搭載のマシン、実はWorkaboutの後期型製品であるWorkabout mxをベースにしている。以下に、初期型との相違を簡単に違いを述べておこう。

先ず外観上の差であるが、上部ドロワの開閉機構が異なる。前期型では前面液晶パネルの左側に搭載したボタ



数字キーパッドオプション搭載Workaboutの外観
ご覧のようにQWERTYキーの代わりに特大のファンクションキーとテンキーが搭載される数字キーパッドオプション。なるほど、これなら現場での情報入力も間違いが少なくて済むな……



018

新旧Workaboutの比較

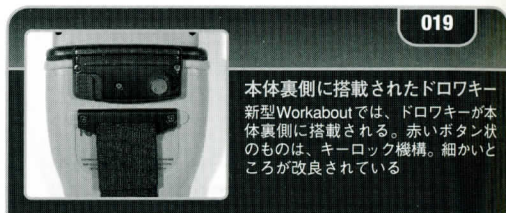
外観上の大きな相違は、ドロワボタンの位置である。旧型(左)は液晶ディスプレイの左側に搭載されていたが、新型(右)では本体裏側にロック機構付きで搭載される。なお、新型では「mx」の表記が加わっている

ンを押すことでドロワの開閉を行っていたが、後期型では本体背面のレバーを押し込むようになっている。また、誤動作を防ぐために、このレバーはロックすることが可能だ(018、019)。

液晶パネルの下に並んだキーボード形状も、若干異なる。良く見ると、「On/Esc」キーとバックライト点灯キーのキートップが、本体形状に合わせて微妙に傾斜している。なかなか芸が細かい。本体裏面の銘板の年代表示も、初期型は1995年、後期型では2000年となっている。

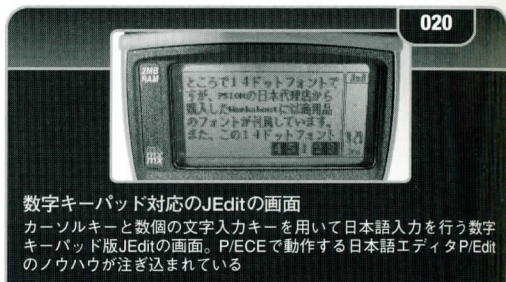
本体仕様での相違は、先ず内蔵RAMが2MBに拡張されている。これにより、JEdit等のアプリケーションも、SSD不要でインストール可能となった。また、mxという名称が示す通り、CPUがNEC V30MX (27.684MHz) にアップグレードされている。これはPsion Series 3mxと同等の仕様だ。CPUの高速化に伴い、各アプリの動作が極めてスムーズで、かつRS-232Cの最大ボーレート設定も初期型は19,200bpsであったが、後期型では115,200bpsまで上昇している。

ところで、柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos)氏は数字キーボード対応のJEditまで開発していたのだ！Workaboutおよび同mxには、ご覧になればおわかりの通り、十字カーソルキーが搭載されている。従って、P/ECE専用日本語エディタ、P/Editで用いた日本語入力の技が流用できるというワケだ。さっそく今回、Workabout mx数字キーボード搭載版にこのアプリを導入してみたが、意外と使いやすい。というのは、キーボード版WorkaboutのキーはQWERTY配列ではなく、タッチタイプに慣れた



019

本体裏側に搭載されたドロワキー
新型Workaboutでは、ドロワキーが本体裏側に搭載される。赤いボタン状のものは、キーロック機構。細かいところが改良されている



020

数字キーボード対応のJEditの画面

カーソルキーと数個の文字入力キーを用いて日本語入力を行う数字キーボード版JEditの画面。P/ECEで動作する日本語エディタP/Editのノウハウが注ぎ込まれている

ユーザにとってはかなり入力しづらかったのだが、その点十字カーソルキーをメインとするP/EditモードのJEditでは、あたかも携帯電話で文字入力するが如く、違和感なく操作できるため、かえって使いやすい感じを受けるのだ。これは意外な発見であった(020)。

今回ご紹介した数字キーボードオプション搭載版Workaboutには、本体上部に何やら怪しげな拡張ユニットが付いている。ユニット側面にはD-Sub 9PinのRS-232C I/Fコネクタが、また上部にはメモ리카ードの挿入口とおぼしきスロットが搭載されているが、詳細は全く不明。おそらくバーコードリーダかなんかを接続し、商品の在庫管理にもちいられていたものだろうと思われる(021)。

MC200が届いた！

前号(秋号)にてちょっと触れたが、イギリスの「Trade In Post」というショップより購入した激レア2品、Psion MC200が無事届いた。店主のJohnは誠実なタイプで、入金連絡後即発送処理を行ったようで、驚くほど早く到着した。最近の物流は、世界の広さを全く感じさせ



021

謎のオプションBox

数字キーボード版Workaboutに搭載されていた謎のボックス。RS-232C I/Fコネクタと、おそらくメモ리카ードを搭載すると思われるスロットが設けられている



022

Psion MC200の外観

これがPsion製品の中でもレア中のレア、MC200。製造台数は極めて少ないようで、今となってはほとんど見かけることが無い



023

MC400とMC200

左側がMC400、右側がMC200。両者の相違は液晶画面の大きさを見れば一目瞭然

ない (022)。

さて、MC200であるが、以前本稿でも触れたMC600、MC400といった、PsionのMobile Computerシリーズの一環で、MC400同様原始EPOC OSを搭載したマシンである。基本的な仕様はMC400に準拠するが、最大の違いはLCD表示だ。MC400では白黒液晶 (Retardation Film LCD: 位相差フィルムLCD) を用い、解像度も640×400ドットであったが、MC200ではSTNブルー液晶 (Supertwist LCD) を搭載し、解像度も640×200と極めて小さかった (023)。

発売時期については、3機種共に1989年9月26日とする資料が多いが、このMC200が一番最初にリリースされ、続いてMC400以降の製品が出てきたとする記述もある。画面解像度が低いこともあり、廉価版としての位置づけが強かったと思われる。また、製造台数もMC400以降とは比較にならないほど少なかったと見え、今となってはほとんど見ることが無い (024)。

本体の外観は、画面が小さいことを除くと、ほぼ同じである。内部仕様のには、MC200の場合、RAMは128Kであったが、MC400では256Kに拡張されている。さて、そこにPsionがあれば、日本語化されるのは時間の問題だ。MC200のように、日本に一体何台あるんだ! (おそらく1台か?) といったようなマシンでも、柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏はエディタを作ってしまう。しかし、さすがにまだ超β版だけだね……。 (; _ ;) (025)

おわりに (もしくは、ご愛読ありがとうございます……)

さて、ここまで書いたところで、編集部より連絡メールが来た。読んでびっくり! 本誌は今号を以て休刊になるとのことなのだ!! なんとということだ! 筆者の完全自己マン世界を構築してきた本連載、まだまだご紹介しきれない端末も多い、というか、これからボスキャラが出てくるというところで、Game Overになってしまった気分というか、もう混乱して何書いているんだかわかりません、てな感じで……。 (; _ ;) /



024

MC200本体裏面の 銘板のアップ

この個体のシリアル番号は「100009」。って一ことは9番目の製品ということ???



025

MC200上で動作する専用エディタ「MCEdit」

柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏の佳作、MC200専用日本語エディタ「MCEdit」の超プロト版が動作しているところ。おそらく日本にはこれ1台と思われるマシン専用のエディタを作成する氏っていったい……

思い返せば1999年、PC WAVE誌のライターでもあったS氏のご紹介で本誌に連載を持たせてもらってから、編集部のみなさまにはご迷惑のかけつけ。もう、ここまで好き勝手に書く手に負えないライターとして、半ば野放し状態ではとかれたのだが、それはそれで筆者的には極楽浄土なのであったのだ。編集部ご担当者のK池さんを初め、関係者一同に御礼申し上げたい。

さて、今後に控えていた端末だが、せっかくなのでプチ紹介しておこう。まずは、来年春号にも予定していた「互換EPOCの世界 (仮称)」にて取り上げようと考えていた、GeoFox One。そう、あのPsion 5の互換品であり、バームトップとしては極めて珍しくグライドポイントを搭載した、カルトマシンだ (026)。

そして、そのさらに上のレア度に行くOsariS (オサリス)。これもまた、EPOC OSを搭載したPsion 5の互換マシンであるが、知名度があまりにも無いため、謎にもならないくらいマイナーな機種だった……。 (; _ ;) (027)

お次は、これぞキング・オブ・謎ば〜機として、その



026

互換EPOC-OS搭載のカルトマシン、GeoFox One これを見て「懐かしい!」と思ったお方は、ほぼ廃人確定です

027



これも互換EPOC-OS搭載のマシン、OsariS (オサリス)
もう、余りにもマイナー過ぎて謎ば〜にすられないマシン

028




キング・オブ・謎ば〜機、Tidalwave ME-386
こちらは、モバイルマニアにとっては有名だったマシン、ME-386。謎ば〜機のお手本のようなマシンで、使いやすかった

029



謎のペン入力マシン、DAUPHIN DTR-1
これは、さすがに日本には入って来ていないようだ。中文版Windows 3.0搭載のペン入力マシンである

030



Omni Book 425
HPマニアの間では有名、95LXのジャンボポッキー版であるOmni Book 425

手の世界では知らぬ人はいないであろう、超メジャー謎ば〜機、TidalwaveのME-386。これはもう、DOS/C謎ば〜機のお手本のようなマシンで、秋葉原でも専門店がかなりの数を販売したものだ。このクラス最強のCPU、80386SXLVを25MHzでブン回したもんだから、DOSのソフトが走るわ走るわ！ おまけに電池も減るわ減るわ……のアメ車め感覚のパームトップだった。PCMCIAスロットも2基搭載され、拡張性にも十分対応していた本機は、CGAゲームも軒並み動作し、ジョイスティックを繋げて、ゲームマシンとして使うことも可能だった。この連載でこのようなメジャーで欠かすことができない機種を紹介できなかったのは、残念だ (028)。

さて今度は打って変わって超マイナーな製品、中国は香港のショップで現地買い付けしてきた謎のペン入力パソコン、DAUPHIN DTR-1だ。このマシン、一応遅いながらも中文版Windows3.0が動いている。特徴的なのは、本体とキーボードとが1つのケースに収まるようにできている点で、外出時には本体のみを持ち歩いてペン入力で使用し、事務所ではキーボードを接続して普通のパソコンのように使うといった芸当ができた。結局、このマシンは日本には入って来なかったようだ。筆者はコイツにWin/V (なつかし〜) を突っ込んで使ったものだ (029)。

Win/Vと言えば、コイツにも入れて使った記憶が甦る！ HPマニアの間ではかなり有名になったOmni Book 425、別名HP95LXのジャンボポッキー版と呼ばれていたものだ。筆者宅にあるものは、そのヨーロッパ語圏仕様

のもの。この機種の特徴といえば、下手なデスクトップマシンを凌駕するキーボードと、王様のアイデアもののPop Up マウスだ。OSはWindows3.1 WorkgroupをROMで搭載しているため、Win/Vで日本語化して使っていた。この上位機種であるOmni Book 600Cは、長い期間筆者のサブマシンとして君臨していた (030)。

この他にも、オリベッティのクワデルノ二個イチ化計画とか、ATARI PortfolioにCFスロットを無理矢理搭載しちゃう計画とか、いろいろと怪しいコンテンツを用意してはいたのだが、さすがの筆者も悪運が尽きたようで、これにて退場と相成った。柴隠上人 稀瑠冥閻守 (Kerberos) 氏は、本誌休刊の知らせを受け、落胆のあまり勢いでPsion Siena 1MB版新品を6台も購入してしまっただけだ！……って、いったい全体どこで見つけて来たんだよ、新品デッドストックのSienaだなんて！！もう、ワケわからん……

突然の知らせに混乱を呈しているが、お許しいただきたい。まあ、休刊ということなので、そのうちまたお目にかかることもあると思う。それまでは暫くの間、日本酒をチビチビやりながら、羽を伸ばすことにしよう。ん？日本酒の銘柄は何かって？？ そりゃ当然「八海山 (吟醸)」だな。故PC WAVE誌が逝っちゃった時も、一人で八海山飲みつつ管巻いてたからなあ……。

m — — m

……合掌！ (完)